

関西社会福祉学会・日本社会福祉学会関西地域ブロック

第41回若手研究者・院生情報交換会 報告

国際福祉研究に取り組む3つの方法論

一質問紙調査、インタビュー調査、フィールドワークを中心に一

立命館大学大学院先端総合学術研究科／日本学術振興会特別研究員 佐草智久

2018年1月20日に同志社大学今出川キャンパス良心館405において第41回若手研究者・院生情報交換会が開催され、40名ほどの参加があった。

自分はこれまで、北海道から沖縄までの全国各地をフィールドに、一次資料やオーラルヒストリーを中心に、各地域の在宅高齢者福祉政策の歴史研究を行ってきた。一方で「国際福祉」を主題にした今回の情報交換会は明らかに自分の専門と異なるため、自分は当初より門外漢として傍観するつもりでいた。

しかし結果として、そのような認識は良い意味で裏切られた。国際研究をテーマとしながら、発表者の問題意識はどれも国内外を問わない、ある種普遍的なものだったからである。基調講演の高杉公人氏（聖カタリナ大学）の発表で言及された、各国で異なるエビデンス基準との向き合い方は、価値観や文化、史資料の残存状況、データの集計方法の差異から地域間の比較に苦慮していた自分にとって、まさに金言であった。

またその後発表された孟浚鎬氏（同志社大学大学院社会学研究科）、田中弘美氏（同志社大学研究開発推進機構）、茶谷智之氏（京都大学大学院アジア・アフリカ研究研究科・日本学術振興会）からも、質的調査と量的調査の関係性、インタビュー調査におけるインタビューの選定やアプローチ、分析方法、調査先での時間調整（スケジュール管理）、経済的コストを伴う長期での調査のノウハウ、フィールドに入ったときの違和感を大切にすることなどが示された。その一つ一つはどれも、国内での調査を通じて彼らとは異なるアプローチから研究に取り組んでいる自分も同様に抱えてきた長年の悩みであり、課題でもあった。特に田中氏が示された、連絡の取れない調査協力者に粘り強く接触していく姿勢は、まさに容易に行えない海外での調査をより有意義なものにせんとする氏の姿勢が体現されており、とても印象に残った。

全体を通して、若手研究者の抱える悩みというものは、研究テーマや研究対象、方法論やフィールドの遠近を問わず、本質的にはかなり共通しているのだということを、改めて

思い知らされた。今後他分野の研究者と交流を深めていく中でも、今回の気づきを肝に銘じて、彼らから多くの学びを得ていきたい。